新建福岡・NOW & PAST
第23号　2021.01.19

発行元
新建築家技術者集団
福岡支部事務局
〒815-0041
福岡市南区野間 3-9-20-4F
[ケイ・プラッツ内]
Tel/Fax 092-541-8128
HP；shinken-fukuoka.net

6/26 仕事を語る会「建築関係者が知っておくべき法律の話」

弁護士　鳥居玲子氏

6/26（金）夜、久しぶりの支部活動である「仕事を語る会」が開かれました。

今回は福岡支部会員で弁護士である鳥居玲子さんより「建築関係者が知っておくべき法律の話」と題して、欠陥住宅問題を中心に、その歴史や、ご自身の経験の話を交えながら、私のような建築技術者が踏まえておくべき法律上のポイントなどについて、お話しいただきました。

密を避けるために会場参加だけではなく、Zoom での参加も可能とするなど、試行錯誤の中での開催となりましたが、全国の会員からの参加もあり、感想や質問などの発言が出るなど、コロナ禍での活動の成功例として得るものがあった会となりました。

まず、知っているようで曖昧な欠陥住宅の定義や、阪神大震災が契機となって社会問題化した歴史からはじまり、当時明らかとなった構造上の問題について、建築技術者として頭に刻んでおくべき内容がスライドの写真とともに語られました。

消費者問題としての側面では、施主・買主である一般の市民、売り主である住宅メーカーや工務店、設計・監理を行う建築士、更には行政や審査機関といった、様々な立場の多くの人が関わる複雑な状況において、問題点も多層にわたっており、あらためて欠陥住宅問題の難しさを認識させられるとともに、それぞれの無責任さや無知・無頓着が問題を大きくしていると感じました。

また、建物のつくり手の立場から見て、理解しておくべき話として、契約責任と不法行為責任があることについても詳しく説明いただきました。

新築建物の欠陥が契約不適合となるかの判断基準としては、建築基準法だけでなく、建築学会や公庫の仕様書による品質・性能も重要な基準となるとのこと、また、名義貸しのような意図的な不法行為や基準法を満足しない設計ミスなどは論外として、監理業務においては、報酬との関係で重点監理のみとしているからというのは免責の理由とはならないといった話は、建築士の一人として、大変勉強になりました。

弁護士として欠陥住宅に関わる難しさの話では、「欠陥現象」ではなく「欠陥原因」を追求する必要がある上に、施主側に欠陥の立証責任があることや、施主の思い入れの強さと造り手側との温度差が大きいことなどがあるとのことでした。

やりがいのお話では、最近になって判例理論が確立し始めた新しい分野であるからといった話とともに、タフな仕事なので鍛えられる、といった話が出るところなどは、たまに体育会系の匂いがする鳥居さんらしいなと思いました。

福岡支部には、鳥居さんの他にも多数弁護士の方がおられますが、同じ新建の仲間として、志ある法律家の皆さんがいてくれることをとても心強く思いなおした夜でした。

残念ながら、私はリモートでの参加であったため、懇親会には同席できませんでした。個人的には、今日のような畏まった姿と同じくらい、いやそれ以上に飲み会での自由闊達な（表現が難しい）鳥居さんの言動が楽しみでして、コロナ禍が落ち着いて、気兼ねなく、またワイワイやれることを心待ちにしています。

（報告：古川学）

10/23 仕事を語る会「戸建て住宅地づくり～ハード面からの街づくり～」

幸建築＆環境設計　井上幸夫氏

講師の井上さんは建築士ですが、今回のお話は宅地開発に伴う街造りのお話でした。

６つの事例の一つは住宅展示場造りで、普段の宅地や街中ではできない実験的な舗装材料を展示場内の道路につかったり、駐車場の舗装を色々な材料で試したり、楽しそうにお話しされていました。宅地開発の事例の中に、私自身が井上さんから声をかけていただいて、一緒に外構プランに携わった「大分パークプレイス公園通り」がありました。今から 15 年以上前のお話しでしたが庭と駐車場の配置や、緩やかにカーブするメイン道路に点在する共用のごみ置き場のプランなど、街造りのお話を伺いながら楽しく仕事をさせていただいたことを懐かしく思い出しました。

ほかの事例のどれも、井上さんの人柄がよく表れている街造りの真髄は、出会いを大切にして、人知を超えた自然の力を活かす、時間を惜しまず人のつながりを大切にはぐくむ所にあるようです。

売れ残りの宅地造成地の土留めを取り払い緩やかな傾斜地に造成し直して、浮いた費用で、大きな樹木を植え、むき出しの造成地にはやがて雑草が生えて雑木林が出来、風景にふさわしい木造住宅が出来て、普通の団地が森の別荘地に見える「どんぐり村」や、もともと生えていた巨木を残して、その隙間に道路を通して宅地や公園を配置した「ガーデンヴィレッジ平尾台」など、施主も住民も造成地のコンセプトに共感した人たちが集まって、街ができるので、共用緑地の管理も業者任せではなく、住民の皆さんの自治会が生まれて、皆さんで、あるいは地元の造園業の方を巻き込んで手入れが出来ているとのことでした。

講演の後、住民の方から塀を作りたいという話はなかったですかと質問があっていましたが、講師の答えは、住む方がここは塀を作ってはいけないところだと思っていたとおっしゃったそうで、やはり人の心に届くコンセプトや説明会、人との出会いや繋がりを育む時間と手間をかけて、初めて成り立つ街造りのお話でした。井上さんの優しさや穏やかな人柄に改めてご一緒に仕事ができた幸せを思いました。ありがとうございました。

（報告：沖本円）

総会に先立って、「樹木とつくる、気楽なまちなみ」と題し、井上幸夫さんの「仕事を語る会」が催されました。ゆとりのある生活文化とは、野山の遊びの精神をいかした街づくりであるとの考えで自ら取り組まれた事例紹介でした。

（その１）元々、自生している樹木を何十本も移植して、その木々の隙間に道路を通すという樹木を優先させる考えです。この北九州市郊外の平尾台の事例は、国交省の「都市景観大賞の美しい街並み特別賞」を受賞されました。

（その２）擁壁工事をなくし、その費用でひな壇状の土地をゆるやかな丘に仕上げ、樹木を植え雑草を生やし、売れ残って長年放置されていた団地を別荘地に生まれ変わらせたものです。北海道の畑地造成では、等高線状に整地します。擁壁はありませんが土は流亡しません。どうしても水みちは、自然にできて次第に大きな溝になりますので対策として暗渠排水パイプを埋設します。

（その３）里庭のある暮らし。フェンスも生垣もなく各家から自由に出入りのできる里庭です。こどもたちにとっては雑木林のような遊びのできる空間で、こどもがのびのびと育つのは間違いありません。私も雑木林で遊んでいました。

人がする造成工事はほどほどにして、まわりの環境に「しごと」をさせるのです。と井上さんは言っておられます。井上さん、これからもこんな良い仕事を続けてください。　（報告：谷口壮一郎）

10/23 2020年度支部総会を開催しました

1）2020年度決算報告の監査と2021年度の予算案が承認されました。会費の未収金はなく原田さんの尽力によるものだとの声が上がりました。毎年繰越金が活用されないのでは意味がないのでHPの通信費、印刷消耗品費、Webの使用料などに使ったらどうでしょうか。

2）2020年度活動報告では、12月頃までは、懇親会、忘年会など予定通りでしたが３月からは、花見は中止Zoomを取り入れた幹事会、総会となりました。「セミナーin福岡」の成功もきわどいタイミングでした。新建福岡50周年は、コロナの感染状況を見ながらの開催になるのでしょうか。

3）◎他団体での企画では、新谷先生たちが取り組まれた大牟田市庁舎の解体中止という文化財保護活動はマスコミにも度々取り上げられました。博多港の国際ターミナルから博多駅までのロープウエイ構想が新谷先生の告発により議会が動き、中止に追い込まれました。福岡市は中国人観光客の消失による大赤字を抱え込まなくて済みました。これも総会で報告されてよかったのではないかと思います。

◎災害支援については、2017年福岡県自治体問題研究所のフォーラムにおいて「７月九州北部豪雨」の現地報告が片井克美さんからありました。当時聞きなれない「線状降水帯」が形成されたのは、背振山の地形に関係していることが気象研究所のシミュレーションで初めて証明された事がこの報告会で明らかにされました。これに関する片井氏寄稿の配布資料の中で、いまだに被災者の支援など課題が山積していることが報告されています。

総会のようす

例会はオンライン併用し、全国からの参加もあり

支部総会の後は懇親会。
早くコロナから解放され、こういう場を持ちたいですね

4）「山あり谷あり福岡支部の50年」では、10年区切りで支部が苦悩しながらも実績を築きあげてきた経過がよくわかりました。これからも多様な人材を受け入れながら、混沌とした社会を照らす職能集団であり続けると思います。

5）「新建福岡支部50年の活動の歩み」では、全国的に名高い建築家との交流を大切にされ福岡支部のレベルを高めていると思います。ソフトボール大会、お花見会、慰安旅行など心身ともに健康です。その時代の課題を探求しようとした時系列の記録ですが資料と合わせれば50年の活動集として価値あるものです。世情のの動きの欄は、わが人生の歩みと重ね合わせながら一件一件マーキングして思い起こし感慨深いものがありました。これを一枚の紙にまとめられた鹿瀬島さんのご苦労のほど感謝します。

6）配布資料としては、新建常任幹事会議長の片井克己さん名で、菅義偉総理大臣宛てに「日本学術会議会員の任命拒否に抗議し、その撤回と6人全員の任命を強く求めます」との10月13日付抗議文の報告がありました。これは、日本学術会議要望書に賛同するもので極めて重要な行動であります。了

（報告：谷口壮一郎）

新型コロナ感染症の対策として換気は大切なことと言われていますね。
谷口さんにご紹介いただいた新聞記事を別紙で掲載していますのでご一読ください

9/1 9月例会「被災マンションＡの軌跡と専門家のサポート」

マンション管理士　藤野雅子氏

9月1日アミカスにてマンション管理士藤野雅子さんのお話がありました。現地参加14名、ZOOMでの参加9名で全国の方も参加いただきました。

熊本Ａマンションの概要を、阪神淡路や東日本地震、福岡西方沖地震と比較して説明がありました。熊本地震の被害は全壊5765件の内マンションが17件（21棟）マンションの32%が被害を受けたとのこと。（他地震では10%台）この違いはやはり一時期問題となったサムシングの影響もあるようです。

築25年のこのマンション、全損の判定は出たものの、新築当時の構造計算の再計算がNGとなり復旧工事をするところがありません。住民の皆さんも裁判で設計者を訴える気力がなかったとのこと。公費解体を利用することで、敷地売却という道を提案し、期限ぎりぎりの2017年暮れに全員合意まで持ち込んだ藤野さんの手腕。住民の民さんの抱える不安に寄り添い、間髪を入れず行動された藤野さんの行動力に思わず拍手！

しかし後から届いた藤野さんからのメールを読み、なるほどと膝を打ちました。以下メールの概要です。

診断４つ

① 応急危険度判定
② 罹災証明
③ 被災度区分判定（有料）
④ 地震保険

藤野さんが被災した管理組合の皆様と一緒に被災後の対応をしたとき、わからないことだらけだったが、その時頼りになったのが、東日本大震災を経験した専門家の皆様のアドバイスだったこと。
で、今度はそれをいろんな方に伝えていけたらよいな、と思い今回のお話をしていただいたとのこと。

もし被災した場合、「診断は４つしかない。」とか「早く申し込みをすれば役に立つ補助金もある。」とか「有料だけど必要な診断がある。」とかの話を思い出していただければ良いと思います。

今後も被災後の行政の施策等は同じようなものが実施されるでしょう。行政の施策は締め切りが早いことも多いので、合意形成に時間がかかる分譲マンションは１日も早くはじめの一歩を歩みだすことが大事です。
そのためには事前にうっすらでも被災後のイメージがあるのが有効だと思います・・・とのことでした。

藤野さん貴重な講演ありがとうございました。（報告：渋田あい子）

7/25 M邸見学会

7月25日（土）17:00　コロナ禍にもかかわらず魂胆見え見えの時間帯、筑紫野は巻口義人氏新居の家褒めに支部会員10数名が集う。

西鉄津古駅から住宅地を抜けて行くと目標は突如現れた。南隣の他人の土地をまるで自分の庭のように構えてその家は凛と立つ。設計はパッシブデザインの鬼、江藤眞理子氏。例によって綿密・緻密に計算、設計された温熱性能でBELS評価、低炭素建築物認定を取得している。九州では初めてという木質繊維外張り断熱材＋漆喰仕上げの外壁は住まいの環境を守る高性能の外皮だ。氏の仕事にまた素晴らしい実績が積みあがった。

設計者の取り組みもさることながら、驚くべきはクライアントたる巻口氏の姿勢だ。縷々綴られた「要望リスト」の冒頭には“家を新築する思い”が熱く語られる。これまでの自分の生き方、将来の目標、そしてその時の流れの中でどのように住まってきたか。それら全てがこの家づくりの原動力でありエネルギーとなっているようだ。さらにそのパワーが地域づくりへも向かうところもまた巻口氏らしい。

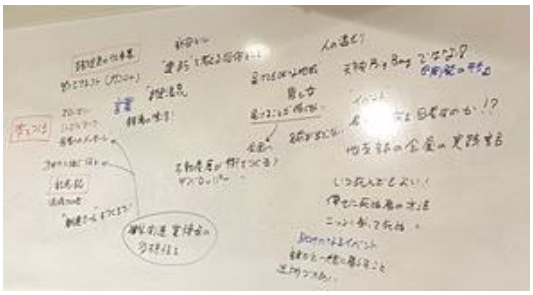
整合の取れた事柄ばかりではあるまい100を超える要望にも建築家は決して「うるさい施主やなぁ」とは思わない。学校の後輩だからではない。無理難題も糧。このすべてを実現するのだ！と意欲を見せる。打率は知らないが、、、。住まい方への大胆な発想にも支えられ、爽やかな内観とノウハウが濃縮されたリジッドな印象の外観が出来上がった。クライアントと設計者の共作と感じた。（報告：大坪克也）

9/11 50周年にむけて 福岡支50周年企画　キックオフミーティング

9月11日(奇しくもアメリカ同時多発テロから19年目の日)、大坪さん事務所の1階をお借りして、新建福岡支部の50周年に向けてのキックオフ会が行われた。参加者は10名。

今年10月に予定されていた全国の50周年イベントは、残念ながらコロナ禍により延期。来年の研究集会に合わせた企画になるようである。今年(2020年)は様々な変化があった。移動が制限され、集まる事を極力避けての感染防止が最善とされる中、ZOOMを始めとしたオンラインが一気に加速した。

支部でもオンライン企画が多数実施されているが、今回は久し振りの対面オンリー会。新しい何かを捻りだす時は、やはり対面で同じ空気内での会話がスムーズ。仕事場からの移動もあり、三々五々に予定時刻を過ぎて集まって来た(私も遅刻組)。消毒・換気を徹底した中で、いつも通り飲み物と各種おつまみが所狭しと並び、予め送られていた宿題をやって来た矢野さんのメモを呼び水に、自由な会話から徐々に深い話になっていった。



結果ですが決まっていません。30周年、40周年の時同様に記念冊子を作る方向。次世代に繋ぐ内容。新建叢書として各自の仕事を報告。バックキャスティング思考で理想を考え、そこから振り返る福岡支部の小説も面白いのでは。スローガンやシンボルマークもあったらいいね！！　などなどと話しているうちに22：00。翌日は6：00～朝読の日でしたので、片井さんを眠らせなければと、じゃんけんで報告者　(私が負け)を決めドタバタ片付して退散しました。まだまだ、支部50周年企画検討は続きます。一日イベントでなく、来年1年間を掛けて長期的な何かでも良さそうですので、皆さま次回もよろしくお願いします。　　(報告：巻口義人)

九州民家大学 第2期終了しました ～宿谷政則先生の「建築環境学」～

自然環境が人間に作用して温かい、寒いと感じることは何故か？このように私たちが当たり前に感じていることの現象を、宇宙、太陽、月と地球の関係、そして分子の構造から考えるという壮大なでありイマジネーションが膨らまされる講義でした。目から鱗が落ちると言うことはこう言うなんだ。普段当たり前とされていることを、自明のこととせず、改めて考えることがいかに大事であるかを教えてくれました。

エクセルギーで環境を考えるという分野を確立する過程で、研究結果を学会で発表すれば、東大の環境分野の権威であるM教授から目の色を変えて全否定される。その反応に驚きながらも研究を諦めずむしろ研究分野の可能性を見いだして研究を始めたものの、海外でもその研究分野が確立されておらず、(先生曰く)巨大な山脈に道を探し、乗り越えたらその先にまた新たな山脈が見えてくる、、この道を進んで果たしてゴールにたどり着けるのだろうか？このような不安を抱えながらひたすら研究を重ねてきたエクセルギー環境学を受講出来るということは貴重な体験でした。

講義の内容に受講者が反応して熱心に聞く。その姿に先生も刺激を受けて熱が入って講義をする。そんな光景が毎回繰り返され、懇親会でさらに盛り上がりました。民家大学を開始する前、講義内容を見た東京の編集者が、内容が専門的であり何十人も集め、しかも10回以上も講義するのは無理と言われたそうである。それを見事に覆した事実は九州の受講者が誇っていいエピソードです。　　(報告：照井善明)

※新建福岡は、今期より九州民家大学の共催団体に加わりました。第2期の宿谷先生の講義は追加講義を含め全14回行われ、新建会員17名を含む55名が受講しました。
来期(2021年度)は、6-8月(全6回)に工学院大学の後藤治教授をお招きし、日本建築史や建築修復学をベースとした内容を予定。9-11月(全6回)は宿谷昌則教授による建築環境論の実践編を予定しています。

風のいろ　（第五話）

小形　ひさみ

前回のあらすじ

帰国に合わせ、雅子の車でイタリアまでの旅を計画したのり子は、週末だけ日本人経営のレストランでアルバイトを始めていた。ムンクの話題がきっかけで親しく話すようになった店の拓二から、手紙が渡された。

窓ぎわの壁の中央にベッドが置かれ、左右に縦長の窓。窓の外側に鎧戸があって、そのルーバーの隙間から朝の光がさし始めた。静まりかえった部屋の、まだ寝息を立てて眠る拓二の足下にいく筋かの光のしまが伸びていた。

先に目を覚ましたというより、眠りつくことができなかったのり子は、そっと起き出して肘掛け椅子に座り、大きく息を吸った。

昨日、拓二と約束の美術館を訪れ、今、こうして彼の部屋にいる。あの夜もらった手紙の拓二の言葉が巡っていた

「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く・・・」空海の言葉の引用で始まった手紙。自分はとっくに捨てていたと思っていた人を求める思い、聞いて欲しいという願い、暖かさを求める思い、それに気づいて驚いています。と。

美術館の展示室を巡りながら、いつかそっと重ねてきた拓二の指の温もりが二人の時間に溶けていった。

二十歳の頃渡ったパリの下町で、絵描き志望の女性と暮らしたこと、意気投合した日本人男性とデンマークに移り、彼の始めたレストランの仕事を手伝っていること。小説を書いていこうとしていること。

「今夜、仕事が終わってから、また会いたい。」

拓二の言葉に頷いていた。

二人とも十分にわかっていた。のり子が日本へ帰る日が、別れの日だと。

だからと言って、想いを止めることはできなかった。

長く暗い冬が終わり、デンマークが最も美しくなる五月、雅子たちとの旅の計画は佳境に入っていた。母からは、父が東京まで迎えに行くという手紙が届いており、のり子にとっては、デンマークに留まるという選択肢はなかった。

「出発前の二日間、休みをとったから。ずっと一緒にいよう。」

拓二の部屋を出る間際の言葉に、現実が突き刺さってきた

つづく

第 32 回全国研究集会　11 月から オンラインで絶賛開催中

4 月ごろまで、各分科会を Zoom で行なっていきます。開催日は全国新建 HP カレンダー欄、内容については「建まち」11 月号でご確認ください。

19:00～21：00 で各分科会がラップせずに計画されています。

従来と違い、会員同士が現地で顔は合わせられないけれど、オンラインの良さを生かした研究集会になっています。全部の報告を聞けるシステムは嬉しいですね。福岡支部会員もいくつかの部会で登場しています。

連載「川崎さんの日本一やさしい木造住宅の構造設計」は、今回はお休みです。

編集後記

支部活動自粛の影響と、私の段取りの悪さもあり、発行が遅くなりましたが、コロナ禍の中、地道に行われていた活動報告をお届けしました。Zoom も意外と便利で悪くないですが、やはり、気兼ねなく皆さんと集まれる日常が待ち遠しいです。（古川学）

（原稿とりまとめ：古川　レイアウト：月成）